

英学史の研究

竹中龍範

(1) 学会・学界の動向

2019年5月1日を以て元号が令和に改められた。生前退位による改元とあわせ、新元号が国書である「万葉集」からとられたことで話題になったが、明治の初め、近代日本が諸施策を進めるうえで拠って立つべき学問的基礎を漢学、国学、洋学のいずれに置くかをめぐり各学派がしのぎを削ったことが思い起こされる。文明度において西洋諸国との差を見せつけられた明治政府がお雇い外国人を多数採用して文明開化を推し進めたことは歴史の語るところである。ただ、この時にあって、わが国は英・仏語などを以て国語としたわけではない。欧米から流入する未知の概念に対して新しい漢語を造ってこれに充てるという手続きにより近代化を進めたのである。この作業に携わった人の多くが洋学者であり、彼らの漢学的素養がこれを可能ならしめたのである。教養が軽んじられる今こそ、このような歴史に学びたいところである。

当年度(2018年4月～2019年3月)も、まず、英学史の研究に係る学会・学界の動きから見ておく。

年度が改まって5月、日本英語教育史学会の第34回全国大会(広島大会)が19日(土)・20日(日)の2日にわたり、県立広島大学サテライトキャンパスひろしまを会場に開催された。初日は、前会長竹中龍範の記念講演「私の英語教育史——研究と教育と」、並びに小篠敏明・田中正道・三浦省五による「鼎談：広島の英語教育を語る」が行われた。2日目は、藤村達也「伊藤和夫の『受験英語』教育に関する研究」など9本の研究発表を聴いた。7月以降奇数月に開催の第268～272回研究例会では広川由子「*Let's Learn English*の編纂過程：Basic English導入の試みとその行方」など9本の研究発表が行われ、〈自著を語る〉では「政策史から現政策を斬る：江利川春雄『日本の外国語教育政策史』を素材に」が指定討論者に坪田清を迎えて行われた。

日本英学史学会は、第55回全国大会を10月20日(土)・21日(日)に、大阪府教育会館たかつガーデンにて開催した。初日は、前関西学院大学学長の井上琢智による特別講演「幕末・明治初期のイギリス留学生——日本の近代化とハムコネクション」を聴き、2日目は、西川盛雄「ハーンとジェーンズを結ぶ浮田和民」など11本の研究発表が行われた。本部例会は、8月と10月を除く各月に第520～529回が開催され、高木不二「日・中・朝の初期アメリカ留学の比較検討」、赤石恵一「札幌農学校1～5期卒業生の『漢学』：『英学』への影響」など10本の発表を聴いた。

回顧と展望

同学会各支部の活動を見ておく。東日本支部の第23回研究大会は、2019年3月21日(木)、東京都文京シビックセンターを会場に開催された。「明治の英学・お雇い外国人」を大会テーマに、河元由美子「お雇い外国人の妻たち」など4本の研究発表と楠家重敏の特別講演「B. H. チェンバレンの手紙」とが行われた。関西支部は、通例、支部大会と研究大会とを分けて開催しているが、当年度は第54回支部大会と第27回研究大会を8月25日(土)に同志社大学にて併催した。支部大会分は総会のみとし、研究大会では加藤詔士「教科書のなかの『お雇い教師』」など3本の研究発表を聴いた。中国・四国支部の第1回研究例会は、5月26日(土)、サテライトキャンパスひろしまにて開催され、田中正道「稲垣巖の『ジョルジュ・サンド考』(原稿)について」の研究発表と、他に資料紹介1本が行われた。第2回研究例会は、12月8日(土)、県立広島大学三原キャンパスにて開催、田邊達雄の特別講演「三原洋学所あれこれ」と山田宗八の研究発表「『印刷法術』英語受容の手引書」とを聴いた。九州支部は、6月16日(土)、熊本大学教育学部を会場に支部大会を開催し、本田憲之助「同志社総長 原田助」を初め5本の研究発表が行われた。なお、役員改選が行われ、西忠温が支部長を退いて顧問となり、西川盛雄が支部長に選任された。

学会賞について、日本英学史学会では、豊田實賞に該当作はなかったが、北垣宗治が『複眼の思想——新島襄・英学史とリベラル・アーツ論』(晃洋書房、2018年4月)により学会特別賞を授与され、小林信行『島田謹二伝——日本人文学の「横綱」』(ミネルヴァ書房、2017年7月)、西川盛雄『夏目漱石考——熊本時代を中心に』(新宿書房、2017年12月)、西口忠『英国聖公会宣教協会の日本伝道と函館アイヌ学校——英国人女性エディス・ベアリング＝グールドが見た明治日本』(春風社、2018年2月)が奨励賞を受けた。日本英語教育史学会でも学会賞の該当者はなかったが、総会において「日本英語教育史学会著作賞」「日本英語教育史学会大会発表賞」の新設が認められ、当該年度中の優れた著作の著者、及び全国大会最優秀研究発表者に贈られる。

(2) 単行本

前年度遺漏分として、田辺陽子編著・西口忠著『英国聖公会宣教協会の日本伝道と函館アイヌ学校——英国人女性エディス・ベアリング＝グールドが見た明治日本』(春風社、2018年2月)を挙げる。本書は、Edith Baring-Gouldの「明治時代の日本に関する写真アルバムと(中略)1894(明治27)年の第1回視察旅行記」(「序 エディス・ベアリング＝グールドと本書について」)に基づく写真集で、73点の各写真には日英語による説明が付され、巻末には両著者による解説が収められている。

当2018年度に刊行をみた英学史関係著作のうち、まず、夏目漱石をめぐる著書から見ておきたい。西洋の意味において「近代小説家」の概念を捉えた際に、漱石を以てわが国初の近代小説家と呼ぶことは極めて至当なことであるとJohn Nathan、

Sōseki: Modern Japan's Greatest Novelist (Columbia University Press, 2018年[5月])は、抽象的で学術的な批評を交えることなく、人間としての、芸術家としての漱石の肖像を描こう(Preface)とする。

同志社と英学について次の3点が刊行された。北垣宗治『複眼の思想——新島襄・英学史とリベラル・アーツ論』(晃洋書房, 2018年4月)は、「ここ20年ほどの間に書いたり話したりしたことを集めて」、「新島襄研究, 英学史研究, リベラル・アーツ教育に対する」著者の思い(「あとがき」)を中心にまとめたものである。同氏『オーテス・ケーリの生涯』(晃洋書房, 2018年7月)は、1947年秋に「アーモスト大学が戦争に敗れてペシヤンこになった日本の同志社大学を支援するために派遣してきた」26歳の青年教師であり、1992年に定年で退くまで同志社大学に教えたオーテス・ケーリについて、「単に科目を教えた先生というより、私の人格を形成してくれた特別の先生であった」(「はじめに」)と尊敬し、敬愛する著者がその生涯を描いている。沖田行司編著『新編 同志社の思想家たち』上下(晃洋書房, 2018年5月, 2019年3月)は、1965年と1973年とに刊行された『同志社の思想家たち』の改版新編で、「同志社の建学の精神が希薄になり、同志社で研究・教育に従事することや働き・学ぶことの意味が見えにくくなっている現実」を前にして、「現在の日本と同志社が直面している高等教育の課題を視野に入れながら」(上巻「はじめに」)、同志社の若手研究者によって執筆されたもので、上巻には新島襄、山本覚馬、大西祝ら10名を、下巻には小崎弘道、徳富蘇峰、徳富蘆花等11名を取り上げる。

人物研究には、「米国オランダ改革派教会の宣教師ジェームズ・ハミルトン・バラ(一八三二—一九二〇)の初期の自伝“Grandpa's Romance of Missions”の翻訳」で、「生い立ちから本格的な伝道を始めるまでのこと」(訳者「まえがき」)を書き記すジェームズ・バラ著/飛田妙子訳『日本最初のプロテスタント教会を創った ジェームズ・バラの若き日の回想』(キリスト教新聞社, 2018年5月)、「アーネスト・サトウを通して幕末史を見て」、「私達が思っている以上に、幕末史においては英国の影響が大きい」ということを、例えば、江戸城の「『無血開城』の動向にまで英国の意向が影響して」(「おわりに」)いることなどを例証して論ずる孫崎亨『アーネスト・サトウと倒幕の時代』(現代書館, 2018年12月)、「一四年間にわたり英語教育界に身を置いた後、「平和運動に身を投じるため」に渡米、「米国を足場に英米を行き来しながら、国家的使命を帯びた仕事に携わ」(「まえがき」)った英学者本田増次郎の生涯を辿り、その功績を解明する長谷川勝政『英学者 本田増次郎の生涯——信仰・博愛と広報外交』(教文館, 2019年2月)が挙げられる。なお、ジョン万次郎がアメリカから帰国したのち、その語るところを土佐藩絵師・河田小龍が書き留めた『漂異紀畧』が1986年に高知市民図書館から復刻されているが、これを底本として現代語に訳したジョン万次郎 述/河田小龍 記/谷村鯛夢 訳/北代淳二 監修『漂異紀畧 全現代語訳』(講談

社、2018年12月)が講談社学術文庫に加えられた。

英語教育史の分野では、江利川春雄『日本の外国語教育政策史』(ひつじ書房、2018年8月)が「歴史的な経験から謙虚に学び、今後の外国語教育政策に与える示唆を得る」ことを目的として、「日本列島の古代における中国語教育から、中世、近世、近代を経て、21世紀の英語が使える『グローバル人材』の育成に至る、約1600年に及ぶ外国語教育政策の歴史を通史的に描く」(「はしがき」)ている。巻末には外国語教育政策に係る年表を付し、32編の関連資料を与えて、読者による判断・評価を促す材料を提供する。塩田勉『〈語学教師〉の物語——日本語教育小史』第2巻(書肆アルス、2018年4月)は、「近代になって歪曲・萎縮させられ、麻痺させられてきた〈語学教師〉の本来の機能を、歴史の中から掘り起こし、現代に蘇らせ、改めて〈語学教師〉とは何であったのか、考察したい」(第一巻「I 上代 飛鳥時代、はじめに」)との意図の下にまとめられたもので、第1巻(同社、2017年10月)が、わが国の上代から中古・中世に至る時代に中国語・漢学の語学教師としてその役割を果たした人物を掘り起こしているのに続いて、いわゆる南蛮時代を扱い、イエズス会宣教師の果たした役割を「I 中世——キリシタン語学の時代」「II 中世——キリシタン語学の先駆者と実践者たち」の2部にわたって論じている。蘭学・英学時代の語学教師列伝の続刊が待たれるところである。水崎雄文『修猷館投石事件——明治二十四年、中学校と軍隊の衝突』(花乱社、2018年11月)は、書名からは英学史との関連が読み取れないが、その第2部を「儒学から英学へ 原書教科書を正則英語で授業した明治の修猷館」と題して福岡県尋常中学修猷館の明治期英語教育を描いている。ほかに、鳥飼玖美子『子どもの英語にどう向き合うか』(NHK出版、2018年9月)が「第二章 英語教育史から探る」に、山田豪『英語教育・訳読の弊害』(文芸社、2018年11月)が「I. 英語の在り方に基づいて受発信すること」において英学史・英語教育史に紙幅を割いている。また、前年度に続いて江利川春雄監修・解題による「英語教育史重要文献集成」第II期全5巻(ゆまに書房、2018年11月)が英語学習法、英語教員講習、英学史研究の部門に分けて刊行、渋谷新平編『英語の学び方』(1918)、Howard Swan 講演・安藤貫一筆記『スワン氏英語教授法』(1902)など、7編の著書・論文が復刻された。

蘭学史の方面では、片桐一男『出島遊女と^{オランダ}阿蘭陀通詞——日蘭交流の陰の立役者』(勉誠出版、2018年4月)が、オランダに残る遊女の手紙を読み解くなどして、「日蘭貿易の陰の支え手が遊女と通詞であったこと」(「まとめにかえたエピソード」)を明らかにし、また、同氏『鷹見泉石——開国を見通した蘭学家老』(中央公論新社、2019年2月)は、下総国古河藩(現・茨城県古河市)江戸家老を務め、「対外応接資料調査の役務を通じて、(中略)北方問題(対口交渉)と蘭学に開眼」(「はじめに——国宝となった鷹見泉石像」)し、退隱後もその蘭学知識を求められた鷹見泉石を描いている。新戸雅章『江戸の科学者——西洋に挑んだ異才列伝』(平凡社、2018年4月)は、江戸時代

英学史の研究

すでに「大きな遅れなく西洋近代科学の成果を吸収し」、「常に実践的な理解を心がけていた」(「まえがき」) 蘭学者 11 名を取り上げて、その業績やエピソードを紹介する。なお、漢学からさらに蘭学や英学においても盛んに行われた外国語学習法である会読について、江戸時代にいつごろ生まれ、どのように展開、継承されたかを明らかにしようとする前田勉『江戸の読書会——会読の思想史』(2012年10月原刊)が、付論を加えて文庫本化再刊された(平凡社、2018年9月)。

関連分野として、日本語学のほうでは、「明治期における『欧文直訳的表現』の成立と定着の過程を明らかに」すべく、明治期の英語教科書とその訳本、翻訳書、夏目漱石と芥川龍之介の作品を資料として分析する八木下孝雄『近代日本語の形成と欧文直訳的表現』(勉誠出版、2018年5月)と、訓読を「中国語の文章や詩をみんなであっつと違った感じのする日本語文に翻訳すること」(「本書を読んでくださる方へ」と捉え、さらに、その訓読文の変遷を説明するうえで不可欠の役割を果たした漢語について論ずる福島直恭『訓読と漢語の歴史』(花鳥社、2019年2月)を挙げておく。

ほかに、石井正己編『外国人の発見した日本』(勉誠出版、2018年6月)は、「西洋の文明を移植するだけでなく、他者のまなざしで日本を見つめ、日本人が意識しなかった日本の価値を発見した」外国人について、「人口に膾炙した人が多い。だが、彼らが有名になった背景にはそれぞれのドラマがあり、それなくしては著名人にならなかった。日本人の中に彼らの業績を受け入れる要因があったことも考えてみなければならない」(「序言 外国人の発見した日本」とのスタンスから J・C・ヘボンや F・レガメ、イザベラ・バードなど 16 名を取り上げる。

(3) 紀要論文等

本節では紙幅の都合により、主として紀要等に論文・研究論考として採択されたものを取り上げ、著者名、題目のみを掲げる。

まず、日本英語教育史学会の『日本英語教育史研究』第 33 号が 2018 年 5 月、全国大会を前に発行された。論文として採択されたのは西原雅博「明治期における中学校英語教授実践の性格：国家基準をめぐる校内伝達組織の制度化とその受容」、及び、内丸公平「シェイクスピアと英語教育：中等学校用英語教科書(1886年-2016年)におけるシェイクスピア受容の考察」の 2 本、他に前年度の第 33 回全国大会講演録として鳥飼玖美子「英語教育論争から考える」を収める。

日本英学史学会『英学史研究』第 51 号は 2018 年 10 月発行、論文に岩上はる子「F. V. ディキンズ訳『方丈記』をめぐる——F. V. ディキンズと南方熊楠の関わり」、三好彰「『英和对訳袖珍辞書』の貨幣に関する邦訳の考察」、保坂芳男「萩中学の英語教育に関する研究：外国人講師に焦点を当てて」、赤石恵一「札幌農学校教頭 W. S. Clark の Amherst College 在学時における経験：同窓生 W. G. Hammond の日記と書簡か

ら、安部規子「広島高等師範学校英語教授・杉森此馬の英国留学——オックスフォードでの平田喜一(禿木)との交流を中心に」、河元由美子「幕末兵学者の英書翻訳——赤松小三郎・浅津富之助訳『英国歩兵練法』を中心に」の6本を採る。

同学会各支部の紀要では、東日本支部『東日本英学史研究』第18号(2019年3月)が、「特集 居留地と英学」に石原千里「横浜海岸教会とヘンリー・ウッド」、高畑美代子「宣教医ヘンリー・フォールズの活動の場東京相对借地——東京府南小田原町3・4丁目を中心に」、三好彰「箱館奉行所の雄・名村五八郎の英語」、同「邦訳語「権理」箱館誕生説への素朴な疑問」の4本を、一般論文に小島和枝「W. G. アストン『英文日本文学史』を読む」の1本を収める。北陸支部は『北陸英学史研究』第13輯を発行し(2018年10月)、山下英一「フィルモア大統領と日本」、篠田左多江「敦賀をめぐる人びとの往来」、牧野陽子「グリフィスの日本民話集をめぐる」の3本を掲載する。関西支部の『関西英学史研究』第11号(2019年2月)は、佐古敏子「訳述英文法書における品詞分類についての一考察——Articleの位置づけと訳語の変遷を視座に」、加藤詔士「お雇い教師ヘンリー・ダイアーの『名刺』」、石倉和佳「『国民之友』と保安条例——阿部充家をめぐって」の3本を採る。中国・四国支部『英学史論叢』第21号(2018年5月)は、田村道美「日本における *Pride and Prejudice* の受容——漱石、豊一郎、弥生子を中心に」、竹中龍範「英字新聞 *The New Japan* 紙のこと——新学制発足期の英語学習副教材」の研究論考2本を収めている。

『東北学院英学年報』は第40号(2019年3月)を数え、松田公江「山川ダンテ 新村出との出会い」を巻頭に、赤井規晃・松田公江・下館和巳「翻刻 山川丙三郎より大賀壽吉宛の書簡(4)」の連載記事、平河内健治「恩師月浦利雄の「英文解釈文法」の独自性について」、小関文典「私の中の志子田先生——受けた薫陶」、森邦夫「大橋吉之輔先生の思い出」を収める。

他に、三好彰「アメリカ人が見た川崎道民——万延元年遣米使節団のアメリカ最新医療体験」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』第13号(2018年9月)、同「新島襄の英学事始め」『新島研究』第110号(2019年2月)、加藤詔士「社会科教科書のなかの『お雇い教師』——『世界の一体化』の進展と教材化」『愛知大学教職課程研究年報』第8号(2019年3月)などが得られた。

(4) その他

小学校英語の教科化、大学入試への英語民間試験導入、その中止声明など、今日ほどに英語教育の問題が一般社会においても取り上げられたことはかつてないと言ってよい。一体、日本の英学界・英語教育界はどこへ向かおうとしているのか、そのような時にあって、英学史・英語教育史の分野からはいかなる発言ができるのか。今一度、「彰往考来」の理念に立ち返ることが求められている。(元香川大学教授)